

2026年6月23日

**世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書（2024 年度採択案件）**

1. 業務の概要	
(1) 案件名	トンガの学校における防災教育と避難計画の策定を通じた持続可能な防災力向上事業
(2) 実施団体名	佐賀県協力隊を育てる会
(3) 実施期間	2025年06月02日 ～ 2026年05月29日
(4) 実施国	トンガ王国
(5) 活動地域	トンガタプ島ヌクアロファ
(6) 活動概要 ①活動の背景： トンガ王国は、「世界リスク報告書 2020 年版」において世界で 2 番目に自然災害に脆弱な国とされており、毎年のようにサイクロンが発生するほか、2022 年 1 月にはフンガ・トンガ・フンガ・ハアパイ海底火山噴火と津波により約 85,000 人（人口の 84%）が被災するなど、自然災害リスクの高い国である。一方で、人材や資金、ノウハウ不足により、防災対策が学校現場に十分実装されておらず、School Safety Resilience Plan (SSRP) の策定や標準作業手順書 (SOP) の整備も十分に進んでいない状況にある。当会が 1 年目（2023 年度）に実施した事業では、トンガハイスクール (THS) において地震・津波を想定した避難計画の策定や防災教育を実施し、防災知識や防災意識の向上、防災訓練の実施など一定の成果を得た。一方で、教員への継続的な防災教育、SSRP の作成支援、さらには発生頻度の高いサイクロンを含む多様な災害への対応強化などの課題が明らかとなった。このような背景を踏まえ、2 年目となる本事業では、1 年目の成果を基盤としながら、避難計画の策定、SSRP の作成支援、避難訓練の実施、防災教育の継続を通じて、現地主導による持続可能な防災力の向上を目指した。 ②活動の目標： 大規模噴火・津波により被災したトンガの学校において、教師、生徒とともに災害に備えた避難計画の策定と防災教育を行うことで、防災力の向上を図る。 具体的には以下 3 点を目標とした。 ①教員に対する防災教育により防災知識を向上させる；②防災リーダーを育成し、生徒間における防災意識を高める；③避難訓練の実施。	

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

1. 防災教育・避難計画策定ワークショップ

2026年2月、トンガハイスクールにおいて、防災専門家（東洋大学・松丸教授）とともに防災教育の講義及びワークショップを実施した。講義には教師約80名、生徒約20名が参加し、地震・津波・サイクロン・火災などの災害特性や、防災の基本的な考え方、災害時に求められる行動について学んだ。講義にはトンガハイスクールの多くの教師が参加し、学校全体で防災について考え、理解を深める時間となった。

翌日には、教師18名、生徒9名が参加するワークショップを開催し、「避難訓練で困ることは何か」をテーマにグループディスカッションを実施した。教師と生徒が同じテーブルを囲み、避難ルートの分かりやすい表示や家族との待ち合わせ場所の事前確認、トンガ語による資料の必要性など、学校生活や地域の実情を踏まえた具体的な意見や提案が数多く挙げられた。参加者同士が活発に議論を重ね、自分たちの学校に合った防災のあり方を考える機会となった。

その後には、教師や生徒とともに校内及び学校周辺を歩き、避難ルートや避難場所、避難時に支障となり得る箇所を実際に確認した。現場での気づきを共有しながら避難計画の検討を進めることで、学校の実情に即した内容となるよう取り組んだ。また、昨年度作成した防災リーフレットについても見直しを行い、現地の意見を反映した「Tonga High School Disaster Safety Guide」を作成し、配布した。



（防災教育講義の様子）



（防災ワークショップの様子）

2. 防災リーダーの育成

ワークショップや校内環境の確認には生徒も参加し、教師とともに避難訓練の課題や改善策について意見交換を行った。教師と生徒が同じテーブルで議論を重ねることで、生徒が防災上の課題を主体的に発見し、提案する機会となり、防災リーダーとしての意識醸成につながった。また、生徒は避難計画の検討にも参画し、自らの学校に適した防災のあり方について主体的に考える契機となった。

3. 避難訓練実施

事前に学校、教育省、National Disaster Risk Management Office（国家災害リスク管理局、以下 NDRMO）との協議を重ね、全校を対象とした避難訓練の実施計画を策定した。協議では、各クラスの担当職員、避難ルート、使用ゲート、避難場所等を確認するとともに、前年度の課題であった支援が必要な生徒への対応についても事前に整理し、必要な支援体制を整えた。

訓練実施前には、深川、地球市民の会の藤瀬、THS、NDRMO、教育省の関係者による最終調整会議を開催し、当日の役割分担や実施手順を確認した。また、全校生徒および教職員への事前説明を2回実施

したほか、訓練前日には NDRMO 職員による教職員向け指導を行い、訓練の目的や留意事項について理解を深めた。

訓練当日は校長の指揮のもと開始され、サイレンの合図に合わせて生徒たちは「Drop, Cover, Hold On」を実践した。その後、各教室から指定避難場所への避難を行い、約 4 分で全校の避難が完了した。避難後の人数確認も円滑に実施され、教職員、生徒ともに訓練内容を概ね適切に実践することができた。

一方で、一部の避難経路やゲート周辺で混雑が見られるなどの課題も確認された。訓練終了後には教職員から速やかに改善点が共有されており、今回の経験を踏まえた避難計画の見直しや、今後の防災教育・訓練の改善につなげていくことが期待される。

なお、本事業全体を通じて、THS、教育省、NDRMO 等の関係機関と継続的に協議を重ね、オンライン会議や現地での打合せを通じて役割分担や活動内容を確認しながら、現地と協働して事業を推進した。

（２）実施成果：

1. 教師・生徒の主体的な防災意識の醸成

本事業の大きな成果は、防災講義やワークショップを通じて、教師と生徒が一緒になって「自分たちの学校にはどのような備えが必要か」を主体的に考えるようになったことである。グループディスカッションでは、避難ルートの改善や家族との連絡方法、トンガ語による資料の必要性など、学校生活や地域の実情に根差した具体的な提案が数多く挙げられた。外部から一方的に知識を提供するのではなく、参加者自らが課題を見つけ、解決策を検討するプロセスを共有できたことは、持続可能な防災力の向上につながる重要な成果となった。

2. 現地の実情を反映した防災体制づくり

教師や生徒とともに学校周辺の確認や意見交換を重ねながら避難計画や防災教材を検討したことで、学校の実情に即した内容へと改善を進めることができた。また、事業全体を通じて現地関係者と継続的に協議を行い、現地と歩調を合わせながら活動を進めたことで、学校が主体となって防災活動を継続していくための基盤づくりにもつながった。

3. 避難訓練実施を経て

2 年間の活動を通じて、校長をはじめとする教職員および学校全体における防災意識の向上が確認された。避難訓練においては、前回実施時と比較して生徒たちがより真剣な態度で取り組む様子が見られ、学校側による継続的な防災教育の成果がうかがえた。

また、訓練当日は約 1,400 名の生徒・教職員が参加し、約 4 分で全校避難を完了することができた。避難後の人数確認も円滑に行われ、学校として一定の避難行動を実践できることが確認された。これまで THS では学校全体の避難計画が十分に整備されておらず、大規模災害発生時に多数の生徒をどのように安全に避難させるかが課題であった。今回の訓練を通じて、各教室の人数把握、避難経路の確認、教職員の役割分担、既存の学校 SOP との調整などを実践的に検証することができたことは、学校防災体制の構築に向けた大きな第一歩となった。

さらに、訓練後には教職員から改善点や課題が主体的に共有されており、今後は今回得られた知見を活かしながら、より実践的かつ高度な避難訓練へ発展していくことが期待される。

（３）得られた教訓など：

■現地主導を支える信頼関係と継続的な関わり

本事業を通じて、現地主導の取組は最初から実現するものではなく、継続的な対話と信頼関係の積み重ねによって少しずつ育まれていくことを実感した。１年目は日本側が提案や調整を担う場面が多かったが、２年目には教師や生徒から主体的に意見や提案が出されるようになり、「自分たちの学校の防災を自分たちでつくる」という意識の変化が見られた。

また、学校や関係者との調整は必ずしも当初の予定どおりに進んだわけではなかったが、現地の状況や意思決定のプロセスを尊重し、オンライン会議や現地訪問を重ねながら対話を継続することで、少しずつ信頼関係を築くことができた。トンガでは時間の流れや進め方が日本と異なる場面も多かったが、その違いを受け入れ、相手のペースに寄り添いながら伴走することが、長期的な協働や持続可能な防災力の向上につながることを改めて認識した。

■現地の声を生かした事業づくり

防災パンフレットの改訂や避難計画の検討では、日本側が内容を決めるのではなく、教師や生徒の意見を丁寧に聞き取りながら、一緒に内容を作り上げていくことを大切にした。その結果、学校の実情や日頃の課題を反映した、より実践的で活用しやすい内容となっただけでなく、参加者自身が成果物づくりに関わることで、「自分たちの学校の防災」という当事者意識も育まれた。完成した成果物そのものだけでなく、その過程を共有することにも大きな価値があることを改めて実感した。

■学校に残る仕組みづくり

生徒は卒業によって入れ替わる一方で、教師は学校に継続して関わり、知識や経験を次の世代へつないでいく重要な役割を担っている。そのため、一時的な研修やイベントで終わらせるのではなく、教師が中心となって防災教育を継続し、防災リーダーを育成していく仕組みづくりが不可欠である。本事業を通じて、学校の中にノウハウを蓄積し、自ら防災活動を継続・発展させていける環境を整えることの重要性を改めて認識した。

■関係機関との連携と今後の課題

今回の取り組みにおいては、現地 NDRMO に派遣されている JICA 海外協力隊員が関係機関との調整や情報共有に協力してくださり、円滑な事業実施に大きく貢献した。

一方で、学校防災に関する方針や SOP（標準作業手順書）の運用について、関係者間で認識の違いが見られる場面もあった。事業実施にあたっては継続的な情報共有と関係機関との丁寧な合意形成の重要性が改めて確認された。今後も教育省、NDRMO、学校関係者との連携を強化し、現地の制度やニーズに即した形で学校防災の強化に取り組んでいきたい。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

今回の活動を通じて、トンガハイスクールでは教師や生徒が主体となって防災について考え、学校の実情に合った取組を進める土壌が育まれつつあることを実感した。今後は、こうした取組が一過性のものとならないよう、教師を中心に知識や経験を継承しながら、防災教育や避難訓練を継続していくことが重要である。

これまでの活動を通じて得られた知見や築いてきた関係性は、今後、東洋大学が中心となって進める JICA 草の根技術協力事業（協働団体として地球市民の会も参画）にも生かされ、トンガハイスクールにおける防災教育や防災力向上のさらなる発展につながるが見込まれる。また、協働した地球市民の会は同校で奨学金事業も継続して実施していることから、学校との継続的な関わりを通じて、防災意識の向上や防災活動の定着にもつながっていくことを期待している。

さらに、今回得られた防災教育や避難計画策定のノウハウは、トンガハイスクールだけでなく、他校や離島地域へも広げていける可能性がある。そのためには、教育省や NDRMO をはじめとする関係機関との丁寧な調整や連携が欠かせない。現地の状況やニーズを踏まえながら、一歩ずつ取組を広げ、トンガ全体の防災力向上につなげていきたい。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

今回の活動では、教師や生徒から、避難ルートや校内の環境について、日常の経験を踏まえた具体的な意見が出される場面が見られた。1 年目と比べ、学校の防災を自分たちで考える姿勢の広がりを感じられた。こうしたやりとりを通じて、防災を“自分ごと”として捉える雰囲気は少しずつ学校の中に生まれてきている。また、こちらから一方的に伝えるのではなく、現場の声を聞きながら一緒に考えていく関係性へと変化してきている点も、今回の大きな特徴であった。

さらに、現地テレビ局に派遣されている JICA 海外協力隊員が本事業の取材を行い、学校での取組がトンガ国内でも広く紹介される機会となった。避難訓練当日には、在トンガ日本大使館の専門調査員や JICA トンガ支所の関係者にもオブザーバーとして参加いただき、学校防災の取組を多様な関係者と共有することができた。こうした発信や関係機関の関与を通じて、本事業への関心や理解が広がることを期待している。

(2) 活動の写真



(松丸教授による防災教育の基礎講義)



(先生・生徒合同のワークショップ)



(避難計画のための学校内観察)



(避難訓練前の THS での打合せ)



(避難訓練の様子①)



(避難訓練の様子②)



(避難訓練後のフィードバック)

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

本事業を２年間継続して実施できたことで、単年度では得られない「関係性の深化」と「現地主導に向けた変化」を感じることができた。１年目で基礎を築き、２年目には現地の教師や生徒が自ら意見を出し、考えながら取り組む姿を見ることができたのは、JICA 基金による継続的な支援があったからこそだと感じている。

当会としても、防災専門家や地球市民の会との連携を通じて、現地でのやりとりや調整の積み重ねから、多くの学びを得る機会となった。特に、計画どおりに進まない場面も含めて、現地と対話を重ねながら事業を進めていくプロセスそのものが、国際協力の実践として大きな経験となった。

さらに、日本国内での報告や発信の機会を通じて、トンガでの取組を共有することができ、地域の方々にとっても国際協力や防災への理解を深める一助となったと感じている。